



再助
西助

女大學寶文庫 全

9
3402



一室女子書

女大子寶文庫

全

松山堂壽梓

故
横山有策氏

昭和四年五月
寄贈



女大子
一室女子の成長と他人の家
男姑は父のなれ男の子も
親の教へをせよとて父母親
をへて忠に育ねれ父の教へ
必だ我れ父の教へ又男
の教へたれ難くも男を

恨み秘中より外なりて終り
退出しむ私と曝そ女子の父母
我利なれど我偶れど男支の
要したるの思ふる保て是皆女
子の親れ教ふたれゆゑあり
一女の害より老女の猶れど吾と
まづ一に緒を交ふに強うく

眼も母出く人を怒り云
糸句は物いひにうたなく口さへ
人よ先立人を恨み悔み我死よ
候の人を侍り笑れ人よ勝り興
なるは皆女の道に違ふ也女を
老く和らぎ順ひて奥より情
深く静なるは長と次

一女子、稚時より男女の別をなく
て、惟初も然きたることを見せし
む。又古の禮、男女の席、或
同し、或せざる衣裳も同し、或
ち異なり。而して活るる物を食し、後
はあまをとりて、坐せしむ。松の
叶を必燭を焼くも、他人の父

よ及ぶるは、夫婦兄弟をても別を
し、また、今時の民が、い
松の法をかく、次いで、松を焼く
り、名を穢し、牡兄弟に辱し、
其一生身を焼く、よき者なり。口
惜きこと、此より、女は父母の命
と、媒物たる此より、交るる松を、小

学もえへる候令命を失ふを
と金右の如くは生くと長とちし
一婦人其の如く我々とす候は唐
ちうへは様とぬるといふ我は
いふは候其の如く我は
まを恨むとて次更ら我は
ふる家の實我は其の如く

とちひ一夜様とて
るを女の方とする古
我は若女は道は背た
一もの如くは婦人
我はと七り一は
女とて二のふた
是妻と我は子孫を續ける

形り独れ在婦人の心山く以義よ
しに妬むたの去後在同性の子
と幸ふべし或い妻にみりて妻
よ子抱くともあふ及ぶこふ淫
私なれを去るにみ悟氣涼れを
去るふの痼病なとの思ふ疾ひ
あれはるたふ多ふよた時と形く

物なるに親類在中の成が
こふはるたのたれあふ七の物を
盗むるを去は七去のる聖人の教
なり女を一度嫁くとも嫁を去
れと再び留まらるるまは嫁を在
女の乃よ遠ひて去るる辱し
一女子我がまをたて教父母よあら

孝といふ理これにまじらざる
ことなり男姑を家親よりも重んじて
尊くせむとて孝の道あるは
親の方を重んじ男姑の方を軽んずるのなり
男姑の方を軽んずるの人は親を重んずる
男姑の方を重んずるの人は業を重んずるなり
男姑の命を重んずるは孝の道なり
男姑の命を軽んずるは業の道なり

男姑の男姑に因てて孝の道は
男姑を我と爲し親の命を重んずる
なり是を孝と爲すは誠にしては
後を必ず中好むものなり
一婦人別は主君を主と爲し
親の命を重んずるは孝の道なり
男姑の命を重んずるは業の道なり

煙を寝み睡のまじし疎更の兄
一變の象數のく我兄弟同くまじ
一癖妬のふ勢く散すくく男様
礼をく疎じし無然じくくを妬
まをれをき氣を伺をく珍愛を
却く更に疎れ見限る物を更ふ
我らにのく我を和る更をや

らに疎じし疎を更くく無
ら先將くて後より更の公私たる
内後疎むく一必要ををく
更をいふも更に更に省くを
一云茶を飲く多くをくく後中
と疎り仍てをくく老人の後を更
みふは修く人傳語をくく

王といひ傳りしやう狂歌と見るゑ
後より家ゆゑも治まらば
一女の嘗てをきくそ身をほく情
護るに胡の平と起ぬ生くるは
至の條よりぬ中のとんち
裁縫續續あるは又茶酒を
多く舌よりばお好む小唄津端

理たものの海よりとて狂
まも杯歌て人多く集りて
十茶より肉よりふりて
一巫覡もののとて迷ひて神仏
活しをりた様より行るゝ
人間の物を独りする所を
とて神仏をちりあへ

一人の妻と成るゝを主として能く保つ
毎年の如く悪く致すべからず
此を破る事あるは佳しき事なり
衣服飲食などをも方々留め
隙の用ひて奢るゝことあり
若くは夫の親類友を不敬する
若くは男にお交はりたふさぐ

一
 身みのま粧まをい裳しやうにき添そをき襟えりをき毛
 目めよこ立たぬぬ袖そでよすずし身みとい衣い服ふくの
 襟えりとき添そをきはは裾すそにき添そをき
 身みのま目めよこ立たぬぬ袖そでよすずし身みとい衣い服ふくの
 襟えりとき添そをきはは裾すそにき添そをき
 我われ身みよこ立たぬぬ袖そでよすずし身みとい衣い服ふくの
 襟えりとき添そをきはは裾すそにき添そをき

一我の親方にて私一丈の方にて親
親次よりまづうづりあるなど
ふも先主の方を勤て次は我親乃
方を勤むべし一丈の許にあらん何
かへもひべし次私一人はなれり
おすべし
一女我親の處より續て男始て治

と徒なりつて親より男始て入切
よりひ者のとるべし一丈の許に
我親の處より男始て入切
他の處へ入方候とをりとも同
なりべし一我親の處より男始
て入切なりつて親より男始て入切
一不始教多なるは金万のり自の幸

男を悪く勅と女の此法に男姑の
乃ち夜を縫合を調えはて衣を
冬席を掃ふを宵洗で洗ひたよ
家内は居て櫻の外出さるる
一女をばへをば用ふべし一軍装
なりたふ福の男を悪く智恵を
人好愛のいふるにうまの
一

男姑小姑と我は合ぬと何と
櫻は櫻のやと女を却て主おと
り婦人より智恵をくはてはて
いふ婦人出来安し元来女は
他人なれぬ報に忠告を授くる
捧て一女の肉をば七大切な男
姑小姑の親を悪くまてうま
一

一 女勝れて多きて悪たふのあり
早く追まほしとねた者い必と親
類の中にも云妨げあを私に基と
うる物あるべし又身ためをば
ふふ食うるもの多し又と想う
ていざれをせむと後後と多し
家の内静まり無きなりと云

云て誤りて事と云ふべし
此の如く想ふべし
みよ外より長と国に意な
はつて一思ふとさるる
ひとて後我々に入ると
立ぬ者よ根よ思ふべし
一 凡婦人の心私の悪たふ和順

らるゝ怒恨と人を侍と物語と智
恵浅きとては疾千人より七八の必
あり是婦人の男に及ぶるを自ら
顧みたる改る中にも智恵の浅
くは又夜も数る女は法性之陰の夜
又晴し不依は女を男よりけりふ
愚みて目新なる物なりとてまか

そ又人の誂るごとくとも毎に我を我
みし笑ふ成るなりとも知れども人
怒り呪詛或人は悟悟と我を我
んとて人み悟れ誂はるを我を
我と成るなりとも知れども人
みと育れども老は瀧水なるを無
君なる何れも我を我と誂るなり

唐右の法は女を産むに
所むとのそは男天など女
地は家の人あはるに
立我を後めあはるに
有とを修るむく又
るはを修るむく又
新て人は偶にわが
新て人は偶にわが

海うねるは腰立候る
と物をあはれ候む
ま棒の中より和た
そひてあはるは
右の條に推し
ておは候るあはれ
今の世は人女子に

學へ婚姻すむるよりむけ衆く
 教るの一生身を保つ室多し古傳
 みるゝ要方錢と出と女を嫁せ
 ひるゝと知て十萬錢と出と女を嫁
 事を知るとより毫成る女を嫁
 るけ理を知とんべいゝるゝ
 女大學終

和漢洋書籍發行所

發行者

藤井利八

東京市京橋區南傳馬町二丁目十八番地

松山堂書店

東京市神田區小川町十二番地

松英堂書店

東京市神田區小川町七番地

松陽堂書店

東京市神田區錦町丁目十番地

松山堂書店

發賣書肆

